

喜ばしい厚相の英断

会社側も率直な態度を

「水俣病」の命名者
九大教授
勝木司馬之助



勝木司馬之助氏

炎のような症状を呈する病気がつきつきに起きている」と深刻な表情で意見を求めてきた。十例の詳しいデータを見せられたとき、わたしは従来ヒールス性脳炎とは異なる何か中毒性の脳障害ではないかと直感的に感じた。その年の八月、患者を診察した。十一人の患者はいずれも意識は混濁し、錯乱状態で手足を激しく振り回す者、これとは逆に手足をからだに引きつけたままジッと虚空をにらみ、動こうともしない者など、生ける屍（しかばね）に等しい姿であった。

奇病の原因究明のため、熊大に

奇病対策委員会が結成され、わたしが委員長になった。とりあえず、熊大と水俣市の委員会が合同検討をしたが、討議の未得られたのは「この病気が世にも珍しいものである」ということだけだった。わたしは委員会にはかつたすえ「水俣病」と命名した。

手厚い国の施策を

家族ぐるみ実験に協力

発病当時県水俣保健所長
だった
県衛生部長
伊藤 蓮雄

私は二十九年暮れから三十八年



伊藤 蓮雄氏

夏まで水俣保健所長をつとめた。初めて患者をみたのは三十一年五月一日、新日野付属病院の野田兼吉医師が車で駆けつけてきて、脳炎ともつかぬ奇妙な病気が出たという。患者をみると手足をふるふるふるわせながらわめき散らす。臨床検査でも原因は全くわからな

いこのこととに全く驚いた。

伝染病ではないらしいということになったが、看護にきていた奥さんが奇病になったため、他の患者が伝染病と騒ぎ出した。市役所や医師会などと話し合った結果、私がとりあえず「日本脳炎疑い」の病名をつけて市立病院の伝染病舎に収容した。

市の医師会から似た症状の患者がいることが報告されたので、五月二十八日保健所、市、医師会の

ともかく岡田厚相の英断で公害に認定されたのは喜ばしい。国はもっと早く決断してほしかった。結論が出た以上、会社側も今後の問題についてはフランクに話し合うべきだ。最後に政治家に言いたい。「科学をもっと大事に投じてほしい」と。

三者で「奇病対策委」を設けて実験調査に乗り出した。

その後は熊大との間に立って病原因究明のためのお手伝いをしたが、苦労したのは死者の病理解剖を患者の家族に説得すること。この間かなりの金が出たが私の申し出にボンと五十万円出してくれた熊大本水俣市長にはいまでも感謝している。原因が水俣湾でとれる魚介類と推定されてからは、公舎でネコを飼って生体実験をしたが、このネコに食べさせる魚を釣るのや、食べさせるのに家族ぐるみで当たった。

あらためて国の認定が出たわけだが、当然施策があつての認定だろうから、この患者者救済は手厚く行なつてほしい。個人的な感情としては、当時われわれに反論していた会社側が自発的に認定してくれたら一番よかったと思う。

元チソ付属病院長だった
愛媛県大洲市の医師
細川 一

政府の見解は当然

一日も忘れぬ悲惨な姿

あれは三十一年の五月だった。病院の野田医師から「また患者が来しました。これで四人です」という報告があった。患者はうつろな目を開き、よだれをたらして、狂いまわるといふ悲惨な症状だった。私がこの症状の患者をみるようになったのは二十九年ごろからで、それまでは原因不明で片づけてきたが、私は※

同じ人災繰返すな

社会の生いたちに病根

侯病と取り組み始めた。

いらい十二年、私は毎年のよう

に水俣を訪れるようになり、現地を回って患者と話し、熊大の研究室や新聞記者に会って資料を集めた。調査が進むにつれて工場排水問題の重要さに目を開かれた。三十八年私は東大衛生工学研究室の

助手になり、一生をかけてこの問題と取り組んでいる。調べれば調べるほど問題は広がり、専門外の社会科学の勉強もしなければならなかった。さまざまな分野からこの病気を追い続けた結果、その病根が日本の社会そのもののおいたちにあることを突き止めたと思う。その痛切な怒りがこの本になった。しかし、この水俣病・新潟水俣病を防げなかったのが私の最大の悔恨だ。

水俣病は決して過去の病気ではない。いまなお苦しんでいる患者があり、生活のどん底に落とされた漁民がいる。健康な私たちが出来ることは、この経験から出来るだけのことを学び、同じ人災を二度と繰返さないことだと思う。「公害の政治学」のあとがきから）



細川 一氏

※ この病気が伝染性のもではないことに気づいていた。患者がふえるにつれて私の心の中に工場排水への疑念が頭をもたげてきた。工場の病院内部でもさつそくネコを使った実験をやったが、工場は水銀説を否定していたし、病気とは何の関係もない物質を次から次へと動物実験させられたりした。あとからは自分で排水をとったりして、三十四年に酢酸工場の廃水を直接ネコに与えて水俣病発症を確認することに成

功したが、工場側から実験を禁止されたこともあり、私もついぶん苦しかった。実験は三十六年ごろ再開され、三十七年にはどうとう排水中のメチル水銀化合物で典型的な水俣病をネコに起こさせることに成功したが、これも発表出来なかった。

この年私は工場をやめ、郷里の大洲に引きこもったが、いまでもあの悲惨な患者たちの姿を一日も忘れたことはない。厚生省が「水俣病の原因は工場排水」という見解を出したが、いいことだ。当然だと思つた。工場も大いに反省し、患者や遺族のために出来るだけのことをしてはしい。

「公害の政治学」を書いた
東大工学部助手
宇井 純

昭和三十四年、新聞で水俣病の原因が有機水銀であることを知ってがく然とした。実は私は三十一年に大学を出て化学工場に勤務したが、そこでも水銀を水で流して



宇井 純氏

いたことがある。その後私は会社をやめたが、有機水銀説を知ってから、本当に水銀からこんな恐ろしい病気が起る可能性があるのかという疑問を解決するため、水

三十四年の漁民騒動のリーダー
宇北町漁協長
竹崎 正己

三十三年

研究班の勇気に敬意

われわれ漁民こそ被害者

工場側はそれけない態度で私たちも個々の力ではどうすることもできず、果敢とていう組織でぶつかるところになった。そして漁民の投石騒ぎに対して工場側が告発の手段に出たことがひどく刺激し、とうとう工場乱入という、漁民一揆（き）（三十四年十一月二日）になった。

工場側はそれけない態度で私たちも個々の力ではどうすることもできず、果敢とていう組織でぶつかるところになった。そして漁民の投石騒ぎに対して工場側が告発の手段に出たことがひどく刺激し、とうとう工場乱入という、漁民一揆（き）（三十四年十一月二日）になった。



竹崎 正己氏

当時経済企画庁や通商省は本質的には被害者であるわれわれに対してきわめて冷淡で、大企業に弱い保守政治の実体をさらけ出し、どうにもならない漁民の悲惨な実情が非常手段へとかりたてたのだ。もう一つ私が落ちたのは、今になって総評などが患者救済を呼びかけているが、なぜそれを当初から行なってくれなかったかということだ。当時工場労働者は企業家の利益にのみ目を向けて

支援待つ患者たち

一生涯を相談相手に

水俣病対策市民会議会長の
水俣市議
日吉フミコ

小学校の教頭だった三十八年三月、初めて胎児性水俣病患者を見舞つて胸をつかれ、なんとか救えないものかと思ひ悩んだ。その年思いがけなく市議に選ばれ、市政に参画する中で解決の道を捜そうとしたが、すでに「解決済み」とのことだと思ひにまかせなかった。ところがことし一月五日、作家石牟礼道子さん（水俣市在住）宅



日吉フミコさん

色のない、純粋な市民運動にしたという願いから既成団体の単位加入を認めず、あくまで個人の任意参加の原則を押し進めてきた。この間、誤解を生んだり資金難に苦しんだり、さまざま苦悩があった。とくに市民会議を色メガネで見、悪意伝説されるのは困った。半面うれしいことも少なくなかった。県内外から支援の手紙がぞくぞく届き、理解者もふえた。

とにかく患者たちは物心両面の支援を待っている。私自身、市議を退き、会長をやめても、一生涯患者たち、とくに胎児性患者の相談相手になつていきたいと念じています。

で年賀の集まりがあったとき、たまたま水俣病が話題にのぼり、市民会議が誕生した。私たちは政治

今後とも社会福祉活動

国、自治体の暖かい手を

水俣病の子供を励ます会の
熊本短大教授
内田 守

三十八年秋、東京で日本社会学会があり、工場誘致と公害の問題が論議された。私も水俣病の例を話したが、それ以来公害を社会福祉の立ち場からもうと見詰めるべきだと思つた。三十九年夏、学生七、八人を連れて水俣を訪問、患者たちにあつたが、とくに胎児性水俣病の子供たちの悲惨な姿に強いショックを受けた。このときも県社会課あたりから「いませつかく静かになつてゐるから、寝た子を起さないでくれ」といった忠告をされたことを覚えている。



内田 守氏

この年水俣にリハビリテーションが出来たが、患者がなかなか入院を勧めて回るとともに、特別付き添いの費用一人分として毎月一万円ずつ負担することを約束した。四十年に学生たちとともに

白紙に戻し再補償を

一生忘れられない水俣

写真集「水俣病」の
写真家
桑原 史成



桑原 史成氏

たというものではない。罪なくして倒れた不幸な漁民、生きながらえても全治の見込みもない患者たち。そして場当たり的な補償方

式、今後これらすべてを白紙に戻して再補償しなくてはすまされない。その日の生活に追われた漁民や患者との示談的な過去の補償は結果的には弱い若いじめになっ

た。一方この問題をめぐって味方もまた多くいた。原因究明に全力をあげた医学者、キャンペーンを続けてきた報道人、地道な市民運動など、これが公害「水俣病」解決の大きなフアクターになった。死の海と化した水俣の漁村をカメラをかついで回つて、あれから八年になる。私は正直なところ「水俣病」のおかげで報道力カメラマンになることが出来た。その意味では水俣は一生忘れられることのできない心のふるさである。だが、できれば水俣という地を世界の人々が知らないまま過す歴史であつてほしかった。そして一人のカメラマンなども出現しなくてもよかったのである。